

アメリカの地理・歴史教科書の検証と国土教育（後編）

一日米「地理」教科書比較と内村鑑三『地人論』一

森田 康夫

国土学アナリスト
元 国土技術研究センター
首席研究員



1. はじめに

前稿（JICE REPORT vol.19）では、米国の教育制度を概観するとともに、小学校（Grade5）及び高校の「合衆国史」教科書を用いて、米国の「歴史」教育を考察した。

その結果、米国では（1）地理や歴史は受験のための暗記科目ではなく、合衆国市民としての教養を習得するための科目として位置づけられている（米国の大学入試では、高校時代の成績や課外活動が最重要視されている）こと、（2）地理教育と歴史教育を二項対立的な構図に持ち込まず、歴史と地理を一体化したカリキュラムを構築していること、（3）合衆国史という歴史科目であっても、「地理・国土（Geography）」が最重要テーマとして含まれていること、等の特徴を明らかにした。

本稿では、「地理」教育にフォーカスを当て、米国地理教育の枠組みを概観するとともに、米国の地理教科書を「国土教育」の観点から検証することにより、わが国の地理教育との相違を明らかにする。

2. 米国における教育改革と地理教育

2.1 教育改革の時代背景

米国では、1930年代のニューディール政策により整備された多くの社会資本が1960年代後半から一斉に老朽化を迎えていた。しかし当時は、大幅なストック量の増大に対して予算措置が追いつかなかつたため、後に「荒廃するアメリカ（America in Ruins）」と呼ばれる事態を招くこととなった。1967年に起きたウエスト・ヴァージニア州とオハイオ州を連絡するシルバー橋の崩落事故では46名の死者・行方不明者を出し、1983年にはコネチカット州のインターステートハイウェイの一部であるマイアナス橋が崩落し3名が死亡した。こうした大惨事以外にも、ニューヨークの幹線道路が穴だらけになったり、マンハッタン島に架かる橋梁が荷重制限のため通行できずスクールバスが橋を渡れないなど、全米各地で橋梁や舗装が劣悪な

状態に陥っていたのである。

こうした課題に対応するため、レーガン政権下の連邦政府は1982年に「交通支援法」を制定し、1983年から連邦燃料税を引き上げ道路投資を倍増、欠陥道路・欠陥橋梁を改善する努力を始めた（道路投資については、その後も拡充が続けられ、「荒廃するアメリカ」の状況は改善されていった）。

このように社会資本の整備・管理が危機的な状態に陥っていた時期、米国では、将来世代への投資に関して、もう一つの大きな課題を抱えていた。それが教育問題である。

前稿で整理したとおり、米国では教育に関する権限は各州政府に留保されているため（アメリカ合衆国憲法修正第10条に由来）、現在でも国家としての統一的な義務教育制度は存在せず、「学区（school district）」と呼ばれる地方教育機関ごとに多様な公教育が行われている。連邦政府が公教育に介入を始めるのは1960年代以降であり、キング牧師に率いられた公民権運動を背景とした1965年の初等中等教育法の制定（貧困家庭の児童に対する教育支援事業の開始）や、1979年の連邦教育省設置がその代表的政策であるが、この時点ではまだ公教育に対する連邦政府の関与は限定的なものであった。

しかし、カーター政権下の1979年にグローバル教育の改善に関する勧告を行った「外国語と国際研究に関する大統領委員会報告」や、レーガン政権下の1983年に子ども達の学力水準の低下を提起した「危機に立つ国家（A Nation at Risk）－教育改革報告書」などをきっかけとして、連邦政府による公教育への関与が本格化していく。1980年代後半に全米規模で巻き起こった「地理教育復興運動」も連邦政府の財政援助を受けた公教育支援活動の一つであり、その運動の中心素材とされたのが、1984年に刊行された「初等および中等学校用 地理教育ガイドライン」（以下「地理教育ガイドライン」と呼ぶ）である。

2.2 地理教育ガイドライン

地理教育ガイドラインは、アメリカ地理学会（Associ-

ation of American Geographers) と全米地理教育協議会 (National Council of Geographic Education) の合同委員会によって刊行された初等・中等学校用の地理教育指導書であり、中山修一氏の著書『地理にめざめたアメリカ』(古今書院)においてその全訳が紹介されている。

地理教育ガイドラインは、(一) 課題、(二) 地理的探求の方法、(三) 地理教育の内容と方法(地理学の5大テーマ)、(四) カリキュラムにおける地理の立場、(五) 地理教育の役割とシークエンス(学年別配当)、(六) 高等学校地理学習で習得されるべき地理的技能、(七) 中・高等学校過程の学習目標、から構成されている。

(1) ガイドラインの課題認識

ガイドライン冒頭の(一) 課題では、「アメリカ合衆国および世界についての国民の無知は、わが国の福祉、国力、国際的な相互依存に、さらには、外国の人々への影響にも大きな結果をもたらすだろう。地理教育は、この無知さを正すのに必要なものであり、加えて地球上の資源を効果的に管理するのに必要な知識と理解を、未来の世代に与えるものである。(中略) 民主主義社会における血の通った効果的公共政策の発展は、自らの社会、さらにそれと他の世界との関係などに広い教養をもった市民の積極的な参加によって高められる。社会にかかわるすべての出来事は、地理的文脈のなかで起こっている。これらの出来事を十分に理解するために、我々は詳細な調査を待たなければならない。これらの問題に含まれるものとしては、郊外地域開発による農業地域の侵食、大都市地域の交通システムが、財政的ピンチに直面する一方で、混雑が着実に増しつつある高速道路の荒廃問題、水系の侵食や汚染からの保護、環境的に調和のとれた土地利用開発を促進するための地帯決定上の保証の問題などがある。(以下略)」と記述されている。

つまり、①地理教育の目標は、合衆国及び世界に対する国民レベルの知識不足の解消と、将来世代に対する地球規模の地理的教養の付与にあるということ、②こうした幅広い地理的教養を身につけた市民の積極的参加によってこそ、現在の民主主義社会で発生している様々な問題が解決できるということ、が地理教育ガイドライン作成にあたっての課題認識として明確に位置づけられているのである。またそれと同時に、③解決すべき問題として「大都市地域の交通システムが、財政的ピンチに直面する一方で、混雑が着実に増しつつある高速道路の荒廃問題」、つまり前述した「荒廃するアメリカ」を取り上げているところが、社

会資本の整備・管理に携わってきた者としては興味深い。

(2) 地理学の5大テーマ

地理教育ガイドラインの最大の特徴は、「地理学の5つの基本テーマ」(通称:5大テーマ)を定義付けたことである。これは、地理教育における地理の見方・考え方を、①位置(Location)、②場所(Place)、③場所における相互関係(Relationships within Places) / 人と環境との関わり(Human-Environment Interaction)、④移動(Movement)、⑤地域(Regions)の5つのテーマに再構成したものであり、ガイドラインによるとその内容は概ね次の通りである。また、5大テーマ毎に区分された中・高等学校過程の学習目標を表-1に示す。

1) 位置(Location): 地表面における位置

- ・絶対的なまたは相対的な位置は、地表面での人々と場所の位置を記述する二つの方法である。
- ・「絶対的位置」: ある見方からすれば、我々は地表面の正確な位置を任意の数学的な緯度・経度を使うことにより、認識することができる。さらに緯度・経度の組み合わせは、一般的にみとめられているように正確な位置を描き出す有効な方法である。
- ・「相対的位置」: 位置ならびにその特徴に関する知識は、地方的、地域的、国家的、地球規模約スケールの相互依存関係を理解するうえでの基本的視点である。

2) 場所(Place): 自然的・人文的特徴

- ・地球上のすべての場所は、それに意味や特徴を与え、他の場所と区別する目に見えたり見えなかつたりする顕著な特徴をもっている。地理学研究者は、一般的に場所をその自然的、人文的特徴によって記述する。
- ・「自然的特徴」: 自然的特徴は地形、水系、気候、植生、動物相などを構成する地質的、水文的、気候的、生物学的な作用に由来する。
- ・「人文的特徴」: 人間の思考と行動とが、ある場所の特徴を形成する。場所は、人口の構成、集落形態、建築様式、レクリエーション活動の様式、運輸・通信のネットワークのちがいにより異なる。ある場所は他の場所から、その住民の主義主張、哲学、宗教信仰、言語、経済・社会の形態、政治組織などによっても区別される。
- ・総じて、場所の自然的、人文的特徴は、人間とその環境間の単純なものから複雑なものまでの相互作用と相関関係を認識し、解釈する鍵を提供してくれる。

3) 場所における相互関係(Relationships within

表-1 米国の地理教育ガイドライン（地理学の五大テーマと中・高等学校過程の学習目標）

テーマ	中・高等学校過程の学習目標
<p>テーマ1 「位置」 地表における位置 LOCATION: Position on Earth's Surface</p>	<p>(1)任意の方眼システムによる座標システムを用いて、場所の位置を定めることができる(絶対的位置)。 (2)他の場所の位置との関係において、ある位置を説明できる(相対的位置)。 (3)位置は、地表面のすべての活動、出来事、人、場所、自然的、文化的特徴についての重要な視点である。 (4)いろいろな場所で行われている活動や変化に、位置がいかに影響を及ぼしているかを説明できる。司令。 (5)ある位置の自然的、文化的特徴が、他の位置の特徴がいかに作用しているかを説明できる。 (6)文化が文化どうし、あるいは自然環境との相互作用により変化することに伴って、ある位置の特徴や重要性もまた、変化することに気づくことができる。 (7)場所間の相互作用には、異なる変化率が働くことを認識できる。 (8)位置とその特徴についての知識は、人間の相互依存関係を理解する重要な要素であることを実感できる。 (9)主要な海洋と大陸の位置を認識できる。 (10)多くの重要な場所や世界の多くの場所の特徴を明らかにし、その位置を特定できる。 (11)地表の各種現象の分布について、地図を用いて質問することができる。 (12)地理の基本的な道具である地図について論じることができる。 (13)各種の地図投影法を識別でき、それぞれの投影法が地表面の相互依存関係の表現を、いかにゆがめているかを論じることができる。</p>
<p>テーマ2 「場所」 自然的・人文的特徴 PLACE: Physical and Human Characteristics</p>	<p>(1)どの場所も、その自然的、人文的特徴に関して明らかに異なっていることを理解できる。 (2)それぞれの場所の地質学的、生物学的その他の自然的特徴を生み出す複雑な自然の仕組みを記述し、解釈できる。 (3)人間の活動や文化が、多くの異なる特徴をもつ場所や類似の場所を、いかに創り出すかを関連づけることができる。 (4)人間の密度の高い活動が、各場所の自然的特徴をいかに劇的に変えることができるかを説明できる。 (5)人々がそれぞれの場所を性格づけ、建設し、名付け、さらにその場所の意識を高める方法などについて述べるができる。 (6)場所はなぜ個人のアイデンティティにとって、また社会を統一するシンボルとして重要であるのかを論じることができる。 (7)異なる社会のグループは、それぞれの場所と異なる見方をすることを理解できる。例えば生活の期間、性別、階層、民族性、価値観や信仰の慣習などにより見方を異にする。 (8)人間は、一つの場所について、いかに多くの見方をすることを例示できる。例えば文化の中心として見たり、重要な資源の産地として、政治的紛争地点として、あるいは必要産物の原産地などとしてみたりする。 (9)場所の特徴や意味は、時間とともにいかに変化するかを例示できる。 (10)それぞれの場所は、人間の行動や自然の力により、損害を受けたり、破壊されたり、または改善されたりすることを理解できる。</p>
<p>テーマ3 「場所における相互関係」 人と環境との関わり RELATIONSHIPS WITHIN PLACES: Human-Environment Interaction</p>	<p>(1)人々が異なる自然環境において居住の場所を求め、つくりかえ、あるいは文化的に適応するいくつかの方法を記述できる。 (2)自然に対する人間側の変化は、文化的評価や領有に基づくものであることを理解できる。 (3)人間が必要な資源を採取したり、作物を栽培したり、集落を開発したりするために、自然環境を評価し、使用方法について例示できる。 (4)自然環境をつくりかえたり、文化景観をつくりだしたりする人間の能力が、技術使用の幅と密度により、いかに増してきたかを述べるができる。 (5)人間による自然環境の改変が、いかに効果と反効果を生み出してきたかを例示できる。 (6)異なる文化をもつグループは、自然環境に対し異なる接し方や見方をもっていることに気づくことができる。 (7)人間は、なぜ自然環境をコントロールしようとするのか、また早ばつ、洪水、地震、ハリケーンなどの自然災害の被害を軽くしようと試みるのかを理解できる。</p>
<p>テーマ4 「移動」 地表面における人間の相互作用 MOVEMENT: Humans Interacting on the Earth</p>	<p>(1)人間の活動が、なぜ移動を必要とするのかを説明できる。 (2)人々が自ら移動し、生産物や思想が地表を歩きまわする方法を述べるができる。 (3)移動は、遠隔地と近くの場所に住む人々の間にみられる相互作用の地球的パターンを反映したものであることに気づくことができる。 (4)生活物資を自給できる場所は大変限られており、それだけに運輸と通信の広範な人々のネットワークが、多くの場所を結びつけていることを理解できる。 (5)移動はある領域では非常に盛んであり、また他の領域ではなはだ疎である。したがって、中心、通路、ヒンターランド(後背地)が形成されることを理解できる。 (6)運輸、通信技術の変化が、人々や商品、さらに思想がある場所から他の場所へと移動する早さに、いかに影響を与えているかを述べるができる。 (7)移動が時代の移り変わりとともに、いかにスピードや頻度を増加させてきたかを議論できる。 (8)すべての文化は、相互に依存し合っていることを理解できる。 (9)エネルギーを節約し、移動時間を短縮し、資源を保全するために、移動がいかに計画され、組織化されるかを議論できる。 (10)移動のやりやすさを改善することが、個々の人間活動にとって最高の立地を決定するために、注意深い分析を必要とするのはなぜかを説明できる。</p>
<p>テーマ5 「地域」 地域はどのように形成され、 変化するのか REGIONS: How They Form and Change</p>	<p>(1)地域は、地理学習の最も基本的な単位であることを理解できる。 (2)地域はなぜ、大変小さいものから大変大きいものまで、スケールが異なるのかを述べることができる。 (3)地域は文化的または自然的特徴により、あるいはその両方によりどのように性格づけられるのかを説明できる。 (4)地域は複雑な現実についての一般的な解説を行う際の、有効な概念的用具であることを理解できる。 (5)地域の概念は、相互作用と連係のシステムのなかで、いかに身近な地域にかかわりあっているのかを述べるができる。 (6)結節地域と等質地域の事例をあげることができる。</p>

Places) : 人と環境との関わり (Human-Environment Interaction)

- ・地表のすべての場所は、人間の居住にとって都合のよい面と悪い面とをもっている。人口の高密度地域は、氾濫原に広がっている。人々はそこで肥沃な土壌や資源、水運の便にめぐまれることができた。だが、氾濫原はときどき大きな被害を被る。
- ・人間は、文化的価値、経済的・政治的状況、さらに技術的能力などを反映しながら自然的状況を改変し、適応し続ける。
- ・地理学は、そうした人間と環境との関係が、いかに発展し、それが人間や環境にとってどのような結果をもたらすのかに関心をもっている。地理を学習することは、自然環境と文化的遺産に対する思いやりを促す。また、人間の行動は、意図的な結果とそうでないものとの両方の結果を生み出すことを示している。その事

例は、洪水や泥流に脅かされているカリフォルニアの沿岸地方でみられる、財産被害を減らすための試みの効果を考えてみよう。これらの災害は、森林火災によって表土がはぎ取られた丘陵地域での雨と土壌侵食の結果もたらされたものである。ダムと沈殿物の取り出し口の建設は、被害を減少させるが、それは守られるべき財産の価値に匹敵するだけの費用がかかるものである。ところが逆の効果として、河川から海浜への砂の供給量を低下させ、海岸侵食のスピードを増加させた。こうして財産の新たな損失が発生し、海浜は、他の場所から運んできた砂によって保護されている。

4) 移動 (Movement) : 地表面における人間の相互作用

- ・人類は地表面に不均等に生活の場所を展開する。ある人々は農場、あるいは田園地帯に住み、またある人々は、町、農村、都市に住む。そして、どの人々も互いに交流する。つまり、人はある場所から他の場所へと

移動し、互いに通信し、彼らを取りまく遠方よりやってくる産物、情報、思想に依存している。

- ・ 地球規模の相互依存と場所間の交流の最も目に見える現象は、世界のいかなる場所をも結ぶ輸送・通信網である。それは、多くの人々が、日常生活でほとんど毎日のように他の場所と交流をもっていることを示している。これはジョージア州の人々が、ワシントン州で採れ、鉄道やトラックでアトランタに運ばれたリンゴを食べていることを示すなにもでもない。もっと規模を大きく考えれば、国際貿易という現象は、どこの国も自給自足できないことを表している。
- ・ 地理は、人・思想・財の移動に関する多様なパターンを説明する手助けとなる。
- ・ 相互作用は、輸送・通信技術の変化に伴って変化し続けるものである。我々はこうした変化に先手を打ち、その地理的ならびに社会的結果を検討することが必要である。

5) 地域 (Regions) : 地域はどのように形成され、変化するか

- ・ 地理学習の基本的単位は、ある選ばれた指標に関して一定の姿を示す「地域」である。
- ・ 我々は国家、地方、郡、都市といった一定の政治的権力をもつ地域をよく知っている。しかもなお、考察すべき問題ごとに意味のある地域を確定しようとするれば、それは数えきれないほどあるものだ。ある地域は行政単位、言語グループ、地形といった一つの指標で区別されるし、また他の地域は、多くの複雑な指標の相互作用により区別される。

この「地理学の5大テーマ」こそが、米国の地理教育において極めて大きな役割を果たしているのであり、その理由は概ね以下の2点に集約できる。

第一のポイントは、地理学という複雑で（扱う分野が広く）興味を持ちにくい学問領域を、とりわけ日本の学習指導要領では「地理的な見方や考え方」というフレーズでしか表現できていない地理科（社会科地理分野）の指導内容を、5大テーマ（①位置、②場所、③人と環境との関わり、④移動、⑤地域）という、非常に単純化され、分かりやすく、多くの人々に受け入れやすいような学習体系に再構成しているということである。そして、1980年代後半に全米規模で巻き起こった「地理教育復興運動」を通して、5大テーマは全米各州の地理カリキュラムや地理教科書（後述）の

中に浸透していった。「地理学の5大テーマ」は、現在では地理学習の冒頭において必ず位置づけられ、繰り返し教えられるべき学習項目として、不動の地位を築いているのである。

第二のポイントは、5大テーマの学習内容や学習目標が「人と国土との間の相互依存関係」を極めて重要視した枠組みとなっていることである。言い換えれば、このシリーズ (JICE REPORT vol.16,17,19) で何度も述べてきた「現在、われわれが享受している豊かで安全な生活は、われわれのご先祖様が絶え間なく国土に働きかけることによって、国土から恵みを返してもらってきた歴史の賜物である。従って、現代に生きるわれわれの世代も、国土に対して働きかけを続け、将来世代に対して、より良い社会基盤を引き継いでいかなければならない。」という国土学、国土教育の思想が、米国の「地理学の5大テーマ」の学習内容や学習目標において明確に位置づけられているということである。

2.3 地理ナショナル・スタンダード

(1) 作成の経緯

1983年の「危機に立つ国家」発表から1984年の「地理教育ガイドライン」刊行、1985年以降の「地理教育復興運動」に至るレーガン政権下での地理教育改革の後、1990年代には、ジョージ・H・W・ブッシュ政権及びクリントン政権下において、もう一つの大きな地理教育改革の流れが生まれた。その契機となったのが1989年の「全米教育サミット」である。同サミットではバージニア州シャーロットビルに集合したジョージ・H・W・ブッシュ大統領と全米50州の知事との間で「2000年までに達成すべき6つの全米教育目標」に関する合意がなされたが、この合意事項の一つに、「第4学年、第8学年、第12学年の生徒は、英語、数学、理科、歴史、地理の各教科において一定水準の学力を習得してから進級する。」という内容が含まれていた。つまり、この全米教育サミット以降、国語、数学、理科とあわせて地理と歴史が主要5教科の中に位置づけられることとなったのであり、これは米国の地理・歴史教育にとって極めて重要な出来事となった。

その後、1990年7月には、ジョージ・H・W・ブッシュ大統領と全米知事会の両者が委嘱した全米教育目標会議 (National Education Goals Panel) が発足、この会議が先導して、主要5教科（英語、数学、理科、歴史、地理）毎の「全米基準 (ナショナル・スタンダード)」を設定す

るための準備（教科別協議会の発足・作業）が始められた。この1990年代の教育改革の動きは、クリントン政権下において「2000年の目標：アメリカ教育法（GOAL 2000: Educate America Act）」の制定（1994年）や各教科毎のナショナル・スタンダードの策定につながっていった。

なお、ナショナル・スタンダードには法的拘束力はないが、「2000年の目標：アメリカ教育法」に基づく連邦補助金の交付条件として、ナショナル・スタンダードを達成するための努力義務が各州に課されていることから、ナショナル・スタンダードはその後の米国の教育システムに大きな影響を与えることとなった。

(2) 地理ナショナル・スタンダードの内容

地理のナショナル・スタンダード（地理的知識・技能の基準を定めた実施目標）は、アメリカ地理学会（Association of American Geographers）、全米地理教育協議会（National Council of Geographic Education）、全米地理学協会（National Geographic Society）及びアメリカ地理学協会（American Geographical Society）の4団体が共同して作成し、1994年に完成したものであり、正式名称は「生活のための地理：地理のナショナル・スタンダード」（Geography for Life : National Geography Standards 1994）、その詳細は、田部俊充・山縣耕太郎・小口久智・多胡清一（共著）、『アメリカ合衆国における「地理ナショナルスタンダード（1994年版）」の全訳』（新地理）において紹介されている。

地理ナショナル・スタンダードでは、地理の本質を①空間的認識、②場所と地域、③自然的システム、④人文的システム、⑤環境と社会、⑥地理的認識の効用の6つの要素（エレメント）に分類し、下位概念として18のスタンダードが設定されている（表-2参照）。

また、18スタンダードは、K-12（幼稚園・就学前の1年間の教育から12年生、すなわち日本の高等学校3年生まで）の13年間を、「幼稚園－第4学年」、「第5－8学年」、「第9－12学年」の3段階ごとに区分して作成され、それぞれ、認識目標及び技能目標（数多くの具体的実践例を含む）が示されている。これは「幼稚園－第4学年」、「第5－8学年」、「第9－12学年」のそれぞれの最終学年修了時に学力テストを実施することと関係しているものであり、また、学年ごとの認識目標・技能目標の配列はいずれも発達心理学の影響を色濃く受けていることがうかがえる。知識・理解、技

能の習得がのちに課題解決型の学習方法につながっていくように配列されているのである。

地理ナショナル・スタンダードでは、6つのエレメントのうち、①空間的認識と③自然的システムを除く4つのエレメントにおいて、「人と国土との相互依存関係」に関する認識目標・技能目標が数多く取り上げられている（表-3参照）。

例えば、「スタンダード5：地表上の複雑性を解釈するために人々は地域を区分する」の第5学年～第8学年までの技能目標では、「C. 空間的・歴史的にいかにかに地域が変化するか説明する。」の例示として「C-2. 人々の日常生活における地域的な交通機関の変化の影響を評価する。（例：新しいハイウエーの建設、鉄道の廃止、新しい空港の建設）」が示されている。

また、「スタンダード14：いかに人類の活動は自然環境を変化させたか」の第5学年～第8学年までの技能目標では、「B. ある地域で人類が引き起こした自然環境の変化が他の地域にも変化をもたらすことがあり得ることを説明し、認識する。」の例示として「B-2 ある地域の河川システムにおけるダムや堤防の建設がどのように下流地域に影響を及ぼすかを説明する（例：このような建設行為は、人間が利用するための水の有用性を制限し、電気をつくることを可能にし、洪水を制御し、河川による輸送を発達させ、かつ生態系の変化を引き起こす。）」が示されているのである。

表-2 地理ナショナル・スタンダードのフレーム

要素 (6 elements)	スタンダード(18 standards)
空間的認識 The World in Spatial Terms	1 空間的視点に基づいて情報を収集・処理・提示するために、地図などの地理的表現・道具・技術の使い方はどうあるべきか。
	2 人、場所、環境に関する情報を組織するためにメンタル・マップを利用できる。
	3 地球上における人々、場所、環境の空間的構造の分析の仕方
場所と地域 Places and Regions	4 場所の自然的・人文的特徴
	5 地表上の複雑性を解釈するために人々は地域を区分する
	6 文化や経験がいかにかに人々の認知に影響を及ぼすか
自然的システム Physical Systems	7 地表の状態を形づくる自然の作用
	8 地球上における生態系の分布の特徴
人文的システム Human Systems	9 人口の特徴、分布、移動を認識できる
	10 文化景観の特徴、分布、移動を認識できる
	11 地表の経済的相互依存のパターンとネットワーク
	12 集落の形成、様式、機能
環境と社会 Environment and Society	13 人間の協同あるいは競争の営力が、地表面の区分や管理と言ったことに、いかに影響を及ぼすか
	14 いかに人類の活動は自然環境を変化させたか
	15 いかに自然的なシステムは人文的なシステムに影響を与えるか
地理的認識の効用 The Uses of Geography	16 資源の持つ意味、利用、分布、および、重要性に現れる変化
	17 過去を解釈するための地理学の適用の仕方
	18 地理的見方考え方を現在の解釈にそして将来の計画にいかにかに適用できるか

表-3 地理ナショナル・スタンダードにおける技能目標の例

場所と地域	【スタンダード4】 場所の自然的・人文的特徴	第5学年～第8学年までの技能目標	C. テクノロジーがいかに場所の自然的・人文的特徴を形成するか、認識し、分析する。 C-1. 場所における様々な型のテクノロジーの影響を分析する。(例: 合衆国北東部回廊地帯における19世紀の鉄道や20世紀の交通の影響) C-2. テクノロジーや見解の変化がいかに場所や時間をこえて人間の修正に影響を与えるかを評価する。(例: 多雨林における開墾、川でのダム建設と野生動物の生息地の確認、湿地における農地の循環) C-3. 孤立したコミュニティがテクノロジーによっていかに変化したかということを説明する。(例: 新しいハイウェイの開通やコンピュータの導入による変化)
	【スタンダード5】 地表上の複雑性を解釈するために人々は地域を区分する	第5学年～第8学年までの技能目標	C. 空間的・歴史的にいかに地域が変化するかを説明する。 C-1. 10年たつことでの地域の変化と、いかにこの変化が地域の特徴に影響を与えるかを示すために、地図やグラフを使う。(例: 1920年のピッツバーグと現在、1930年代のカザフスタンのアラル海地域と現在) C-2. 人々の日常生活における地域的な交通機関の変化の影響を評価する。(例: 新しいハイウェイの建設、鉄道の廃止、新しい空港の建設) C-3. 地域的な特徴の変化に関する要因を説明する。(例: 経済発展、近接性、移住、メディア・イメージ)
環境と社会	【スタンダード14】 いかに人間の活動は自然環境を変化させたか	第5学年～第8学年までの技能目標	B. ある地域で人間が引き起こした自然環境の変化が他の地域にも変化をもたらすことがあり得ることを説明し、認識する。 B-1 ある場所で起こった環境の変化がどのように他の場所に影響を及ぼすか説明する。(例: 風によって運ばれる工場の排気ガスの風下の集積への影響、およびそれによって起こる酸性雨の風下に位置する生態系への影響: 川に洗い流されていく殺虫剤の下流の集積における水質への影響) B-2 ある地域の河川システムにおけるダムや堤防の建設がどのように下流地域に影響を及ぼすかを説明する(例: このような建設行為は、人間が利用するための水の有用性を制限し、電気をつくることを可能にし、洪水を制御し、河川による輸送を促進させ、かつ生態系の変化を引き起こす。) B-3 世界のある部分での環境変化がどのように世界の他の部分に影響を及ぼすかを表現したグラフ、表、地図を作成する。(例: 北アメリカにおける産業活動と酸性雨、チェルノブイリの原子力発電所事故とヨーロッパとアジアでの放射性降下物)
	【スタンダード15】 いかに自然的なシステムは人文的なシステムに影響を与えるか	第5学年～第8学年までの技能目標	C. 人文的なシステムに対する自然災害の影響について述べる。 C-1 世界やアメリカ合衆国の中の様々な地域における人類と自然災害との関係について述べる。(例: 経済や産業の発達の影響は、エチオピアの人口に対する干ばつの影響と、オーストラリアやアメリカ合衆国南部の人口への干ばつの影響との比較においてどのようにあらわれてくるか) C-2 自然災害を、人間への影響の激しさに基づいて位置づける。(例: 事象の長さ、死者の総数、経済的な損失の総量、社会的な影響、長期的な影響、関連した災害の発生度合い) C-3 人間の自然災害に備えての対策の方法について説明する。(例: 地震対策、氾濫原地域において支柱の上に住居を建築する、台風が頻繁に襲来する地域での避難地や避難路の設定)

3. 米国の地理教科書と国土教育

次に、米国で用いられている中学地理教科書及び高校地理教科書、具体的には McDougal Littell 社（現在は、米国の最大手教科書出版社 Houghton Mifflin Harcourt 社の中等教育専門会社 Holt McDougal として再編されている）の『World Cultures and Geography 2008』及び『World Geography 2009』を取り上げ、その内容を検証することにより、「国土教育」面から見た米国の地理教育の特徴を整理した。なお、Houghton Mifflin Harcourt 社（Holt McDougal 社を含む）の社会科教科書は、全米最大の教育現場・カリフォルニア州教育局のホームページにおいて社会科教科書出版社として登録・紹介されているとともに (<http://www.cde.ca.gov/ci/cr/cf/>

hsspublishers.asp)、(株)丸善が取り扱う唯一のアメリカ合衆国社会科教科書である。

3.1 中学地理教科書の内容（日米教科書比較をとおして）

『World Cultures and Geography 2008』は、世界地理の概要 (Unit1) と世界地誌 (Unit2: 合衆国とカナダ ~ Unit9: オセアニアと南極大陸) とで構成される中学生用の地理教科書であり、前稿で紹介した小学生用歴史 (合衆国史) 教科書と同様に、写真・図表・地図などの資料が豊富で(オールカラー)、百科事典のような体裁をしている。(図-1、2 参照)

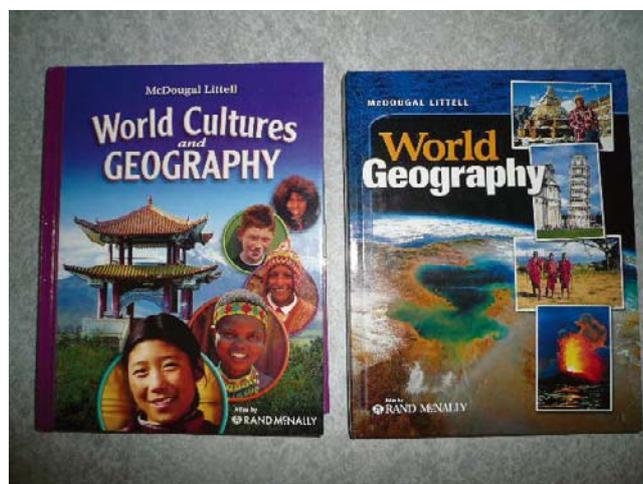


図-1 米国の中学/高校「地理」教科書 (McDougal Littell 社) ^{12) 13)}

<p>□Unit1「世界地理の概要」</p> <p>■地球と人間を理解する</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地理の5大テーマと6エレメント 2. 地理で用いる科学技術 3. 地理を活かした職業 <p>■地球の仕組み</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地球と内外作用 2. 水循環と地形 3. 気候と植生 4. 環境への挑戦 <p>■人文地理</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人口地理 2. なぜ人は移動するのか 3. 資源と経済 4. 政治はなぜ必要か <p>■人と文化</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 文化とは何か? 2. 文化はどのように変化するか? 	+	<p>□Unit2「合衆国とカナダ」</p> <p>■合衆国</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地理 2. 歴史 3. 文化 4. 政治と経済 <p>■カナダ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地理 2. 歴史 3. 文化 4. 政治と経済
<p>□Unit3「ラテン・アメリカ」</p> <p>□Unit4「ヨーロッパ」</p> <p>□Unit5「ロシアとユーラシアの共和国」</p> <p>□Unit6「アフリカ」</p> <p>□Unit7「南アジアと南アジア」</p> <p>□Unit8「東アジアと東南アジア」</p> <p>□Unit9「オセアニアと南極大陸」</p>		

赤字: 日米地理教育の相違点 (米国の地理教科書にあって日本の地理教科書に無い項目)

図-2 米国の中学地理教科書の内容構成 (McDougal Littell 社) ¹²⁾

(1) 世界地理の概要 (Unit1)

世界地理の概要 (Unit1) では、地理学の有用性に関する事項 (地理の5大テーマと6エレメント、地理に関する科学技術、地理を活かした職業)、自然地理に関する事項 (地球の内外作用、水循環・地形、気候・植生、環境)、人文地理に関する事項 (人口、人の移動、資源・経済、政治、文化) など、世界地理のアウトラインが説明されている。

なかでも、この教科書の冒頭 (第1章) において、地理

教育ガイドライン由来の「地理学の5大テーマ」と地理ナショナル・スタンダード由来の「6 エレメント」が説明されていること、言い換えれば、地理教科書の最優先学習課題として地理の5大テーマと6 エレメントが位置づけられていることが重要である（図-3 参照）。

また、地理で用いる科学技術（GIS/GPS）や地理を活かした職業など、実社会における地理の有用性を学習する機会を設けていること（第1章2～3節）、自然地理の学習範囲に「地学」の内容を含んでいること（第2章1節）、移動（Migration）という概念を重要視していること（第3章2節）、政治地理を積極的に扱っていること（第3章4節）などが日本の中学地理教育との違いとして読み取れる。

(2) アメリカ合衆国の地誌（Unit2 / 第5章）

第5章では、地理（第1節）、歴史（第2節）、文化（第3節）、政治と経済（第4節）に区分して、アメリカ合衆国の地誌が記述されている。自国の地誌を説明する場合と他国の地誌を説明する場合とで、記述分量やその程度に違いがあるのは当然であるが、ここでは、日本の中学地理教科書（平成22年度、東京都において、最も多くの地区で採択され

た「東京書籍」の教科書）におけるアメリカ合衆国の地誌に関する記述と比較することにより、米国の中学地理教育の特徴を整理した（表-4 参照）。

- アメリカ合衆国の地理的特徴（多様な地形・気候・植生と人間活動）、文化的特徴（移民で構成される社会と多様な文化）、及び経済的特徴（世界最大の経済大国）は、日米双方の地理教科書において取り上げられている。
- 米国の地理教科書では、大陸入植（ベーリング地峡を渡ってきた先住民、ヨーロッパからの移民と植民地建設）から現在に至るまでの「アメリカ合衆国建国の歴史」が一節を割いて説明されているのに対し、日本の教科書では、「歴史」は全く取り上げられていない。
- 米国の地理教科書には、アメリカ合衆国の政治（アメリカ合衆国憲法と修正条項、代表制民主主義、連邦政府と州政府、三権分立）についてのまとまった記述があるのに対し、日本の教科書には「政治」に関する記述はない。
- 米国の地理教科書では、州間高速道路（Interstate

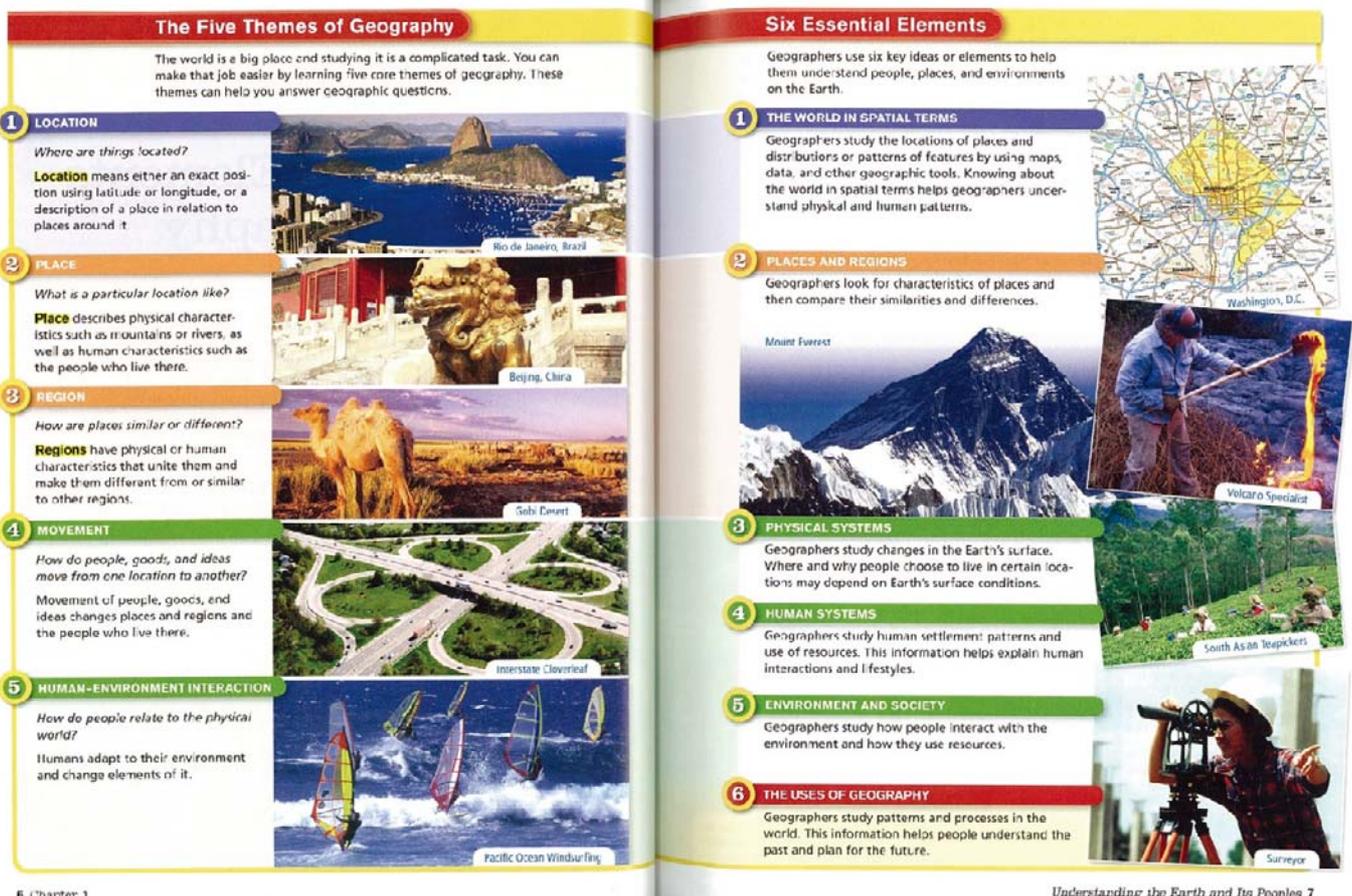


図-3 地理の5大テーマと6エレメント（McDougal Littell社の中学地理教科書より）¹²⁾

表-4 日米の中学地理教科書が記述する合衆国と日本の地誌（人と国土）

	米国の教科書が記述する内容	日本の教科書が記述する内容
アメリカ合衆国	地理 ■大西洋沿岸から太平洋沿岸まで ○大西洋沿岸から太平洋沿岸に至る多様な自然地理(地形・気候・植生と人間活動) ○北東部(ヨーロッパから最初に入植があった地域、最も人口密度の高い地域、アパラチア山脈と沿岸平野、温暖・多湿な夏と寒冷で雪の多い冬、貿易・製造業・サービス産業) ○中央西部(グレートプレーンズ、五大湖とミシシッピ川、高温な夏と寒冷な冬、農業・製造業・交通・貿易) ○南部(アパラチア山脈と低湿地、メキシコ湾・ミシシッピ川・大西洋、高温多雨な夏と温暖な冬、農業・製造業・石炭鉱業・石油採掘業) ○西部(ロッキー山脈、太平洋、多様な気候(乾燥、多雨・温暖、寒冷、熱帯)、牧場経営・鉱業・林業・農業・ハイテク産業)	○地域によって異なる自然(日本の25倍の面積をもつ大國、様々な地形、雄大な自然を保護する国立公園、気温の高い南部や気温の低い北部、雨が多い東部や雨が少ない西部、都市が国土の東部に多い)
	歴史 ■国家建設 ○大陸入植(ベーリング地峡を渡ってきた先住民、ヨーロッパからの移民と植民地建設) ○国家建設(フレンチ・インディアン戦争、独立戦争と独立宣言、アメリカ合衆国憲法と三権分立、西部開拓など国土拡張の歴史) ○危機と変化(南北戦争とリンカーン、領土の拡張、大陸横断鉄道の建設、工業化・都市化) ○21世紀へ(大恐慌、ダストボウルによる荒廃、二つの世界大戦、公民権運動、世界の中のアメリカ)	-
	文化 ■多様な文化 ○移民が多い理由(幸福で成功した生活が得られる、教育の機会が得られるという期待感) ○言語(英語、スペイン語、中国語、フランス語、ドイツ語) ○宗教(プロテスタント52%、カトリック24%、ユダヤ教、モルモン教、イスラム教、他) ○民族(先住民、ヨーロッパからの移民、アフリカ系、ヒスパニック、アジア系) ○芸術と大衆文化(文学、音楽、スポーツ、エンターテインメント、レジャー)	■さまざまな民族と文化 ○多様なアメリカ人(先住民、ヨーロッパからの移民、アフリカ系、ヒスパニック、アジア系) ○移民とアメリカ社会(移民の努力によって建設されてきた国、移民審査と市民権の取得)
	政治・経済 ■民主主義と自由企業 ○合衆国政府(アメリカ合衆国憲法と修正条項、代表制民主主義、連邦政府と州政府、三権分立) ○アメリカ経済(自由企業による資本主義経済、サービス産業(78%)・製造業(21%)・農業(1%)、アメリカ経済を支える45,000マイル超の州間高速道路(Interstate Highway)ネットワーク、グローバル経済と多国籍企業)	■大規模な農業 ○合理的な農業生産(少ない労働力で広い面積を経営する企業的な農業) ○世界最大の食料輸出国(小麦、大豆、とうもろこし等) ■巨大な工業力 ○豊かな資源と進んだ工業(鉄鉱石や石炭・石油などの豊富な地下資源、世界最大の工業國、盛んな科学技術の研究・開発) ○世界への影響力(多国籍企業)
日本	地理 ■日出ずる国 ○島国日本(本州・北海道・九州・四国)、環太平洋造山帯に位置する地震大國(関東大震災・阪神淡路大震災)、空間不足(国土の70%は山地か丘陵地、人口密度が高く都市の混雑が著しい、象徴としてのカプセルホテル) ○気候と資源(変化に富む気候、森林と水産資源等を除いては乏しい資源)	■世界と日本の自然環境 ○世界の地形のようす(環太平洋造山帯に位置する地震・火山活動の盛んな「日本」⇄世界の大陸のほとんどの地域は地震や火山活動のない安定した陸地に位置) ○日本の山地と海岸(陸地の約3/4が山地か丘陵地、本州中央部を貫く高さ3,000m級の日本アルプス、国土面積に比べ海岸線が長い等) ○日本の川と平野(急流で流域面積がせまい日本の川⇒多目的ダムによる洪水調節や水資源確保等、せまい平野に人口の大部分が暮らす) ○日本が属する温帯の特色(季節風、梅雨、台風) ○自然災害とその対策(地震、洪水、津波、火砕流、土石流、高潮等と防災対策) ■世界と日本の人口 ○日本の人口と人口問題(少子高齢化) ○三大都市圏への人口集中、過密・過疎問題とその対策
	歴史・文化 ■サムライ(侍)からアニメへ ○鎖国から世界勢力へ(平安時代までの朝廷政治と平安文化、侍(源平)時代から鎌倉幕府・武家政権へ、徳川家康による国家統一と鎖国、明治～戦後：現代日本の夜明け) ○伝統的の日本文化と現代的の日本文化(神道と仏教、日本芸術、日本文学、生活習慣)	■世界と日本の生活と文化 ○日本の伝統的な生活 ○変化する生活(耐久消費財の普及、海外文化の移入) ○古都(京都・奈良)にみる伝統文化 ○沖縄やアイヌの生活と文化
	政治・経済 ■経済大國 ○日本政治の近代化(民主主義と象徴天皇制、日本国憲法と基本的人権・戦争放棄、議員内閣制と三権分立) ○強大な経済力の創出(旧財閥系企業の存在と経済成長、高度経済成長時代と「失われた10年」) ○経済生産(経済成長の基盤となった製造業とイノベーション、コメを中心とした農業、金融・エンターテインメント・観光等のサービス産業の拡大)	■世界と日本の資源と産業 ○日本におけるエネルギー問題 ○日本の農業 ○日本の林業・漁業 ○日本の工業 ○日本の商業・サービス業 ■広がる地域間の結びつき ○広がる日本の交通と通信網(新幹線、高速道路、航空路、本州四国連絡橋等) ○交通がもたらす地域の変化(東北自動車道・関越自動車道・東北新幹線・上越新幹線等の整備と北関東地域の人口・工業生産額等の変化) ○交通・通信の発達とくらしの変化(医療や流通)

※アメリカの教科書：『World Cultures and Geography 2008』(McDougal Littell 社)

※日本の教科書：『新編 新しい社会 地理』(東京書籍)

赤字：日米地理教育の相違点(米国の地理教科書にあって日本の地理教科書に無い項目)

緑字：日米の地理教科書における「国土教育」的特徴

Highway) ネットワークを例示することにより、アメリカ経済を支える基盤としての装置インフラの重要性が説明されている。

(3) 日本の地誌 (Unit8 / 第27章)

同様に、日本の地誌に関する記述(第27章)を取り上げ、日米の教科書比較によって米国の中学地理教育の特徴を整理すると、次の通りとなる(表-4 参照)。

- 日本の地理的特徴(島国、環太平洋造山帯に位置する地震大國、狭い国土)、文化的特徴(伝統的文化と現代的文化の共存)、及び経済的特徴(世界有数の経済大國)は、日米双方の地理教科書において取り上げられている。
- 米国の地理教科書では、古代から現在に至るまでの日本の歴史(平安時代までの朝廷政治と平安文化、侍

(源平) 時代から鎌倉幕府・武家政権へ、徳川家康による国家統一と鎖国、明治～戦後：現代日本の夜明け)が記述されているのに対し、日本の教科書では、「歴史」は全く取り上げられていない。

- 米国の地理教科書には、日本の戦後政治(民主主義と象徴天皇制、日本国憲法と基本的人権・戦争放棄、議員内閣制と三権分立)についてのまとまった記述があるのに対し、日本の教科書には「政治」に関する記述はない。

なお、日本の中学地理教科書の国土教育的検証は、JICE REPORT vol.16において既に実施済みであるが、今回、米国の中学地理教科書と比較することで、日本の中学地理教科書の優れた点が改めて浮き彫りにされたので、

以下に追記しておく。

1) わが国の国土の自然条件を学ぶ

- 日本は活動する陸地（環太平洋造山帯）に位置するため、地震や火山活動が多い。一方、世界の大陸のほとんどの地域は、地震や火山活動がない安定した陸地に存在。
- 陸地のおよそ3/4が山地と丘陵地。また、本州中央部を貫く高さ3,000 m級の日本アルプスにより本州は南北に分断。
- 国土面積に比べ海岸線が長い。
- 急流で流域面積がせまい日本の川（日本と世界の河川の延長・勾配の比較）⇒水量の変化が大きい⇒ダムによる水量調節、電力発電、水資源確保
- せまい平地に人口の大部分が暮らす。
- 台風の上陸（風水害）
- 降雪とそのメカニズム（日本海側の雪⇔太平洋側の晴天）
- 自然災害とその対策（地震、洪水、津波、火砕流、土石流、高潮、なだれ）

2) 交通の発達と地域の変化、生活への影響を学ぶ

- 広がる日本の交通と通信網（新幹線、高速道路、航空路、本州四国連絡橋等）
- 交通がもたらす地域の変化（東北自動車道・関越自動車道・東北新幹線・上越新幹線等の整備と北関東地域の人口・工業生産額等の変化）
- 交通・通信の発達とくらしの変化（医療や流通）

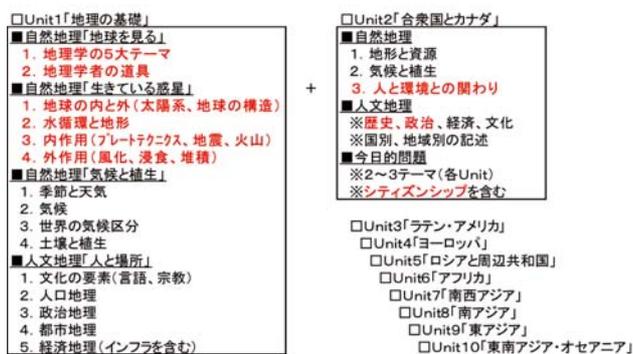
3.2 高校地理教科書の内容（日米教科書比較をとおして）

本節では、McDougal Littell社の『World Geography 2009』と帝国書院の『新詳地理B 初訂版』（平成22年度の東京都立普通科高校で採用数最上位）との比較をとおして、「国土教育」面から見た米国の高校地理教科書の特徴を以下の5つの論点で整理した。なお、論点(2)～(4)の整理にあたっては、明治～大正期の思想家・内村鑑三が著した地理教育書『地人論』を参照することにより、地理教育・国土教育における当該論点の重要性を考察した。

- (1) 「地理学の5大テーマ」という明瞭な哲学の存在
- (2) 「地学」を含めた地理教育
- (3) 「歴史・政治」を含めた地理教育
- (4) 「人と環境との関わり」という学習単元の存在
- (5) その他（日本をどのように見ているか）

(1) 「地理学の5大テーマ」という明瞭な哲学の存在

『World Geography 2009』は、地理の基礎（Unit1）と世界地誌（Unit2：合衆国・カナダ～Unit10：東南アジア・オセアニア・オーストラリア）とで構成されているが、前述の中学地理教科書と同様、教科書の冒頭（第1章1節）において「地理の5大テーマ」が説明されていること、言い換えれば、地理教科書の最優先学習課題として「地理の5大テーマ」が位置づけられていることがポイントである。（図-4 参照）



赤字：日米地理教育の相違点（米国の地理教科書にあって日本の地理教科書に無い項目）

図-4 米国の高校地理教科書の内容構成（McDougal Littell社）¹³⁾

(2) 「地学」を含めた地理教育

米国の教科書では、地理の基礎（Unit1）の第2～3章において、「地球の内と外（太陽系、地球の構造）」「水循環と地形」「地球の内作用（プレートテクトニクス、地震、火山）」「地球の外作用（風化、浸食、堆積）」「季節と天気」「気候」「世界の気候区分」「土壌と植生」という8つの節に区分して「自然地理」が説明されている。日本の地理教科書と比較してみると、太陽系（天体）や地球の構造（大気圏や地球の内部構造）、地球の内作用（プレートテクトニクス、地震、火山）といった「地学（地球科学）」に分類される内容が、地理教科書において十分なページを割いて記述されているのが特徴である。

一方、内村は、『地人論』冒頭の「地理学研究の目的」において、「これを空間の無限大に比すれば、塵埃の細微なるもなお大に過ぐるがごとく、これを天体中大と称すべからざる太陽に比すれば、わずかに百三十万分の一たるにすぎず。これをその姉妹球なる木星に比するも、なお、小豆が、橙における比例なり。されども、この塵埃小の空間の一点、この小豆大の地球こそ、吾人生命のつながる所に於て、我はこの地に初めて生を有し、この地に有せられ、この地に自覚し、この地に愛し、愛せられ、ついにこの地

に死骸をのこして逝く。我に生を給せし地球、我の生命を
与うる地球、我の遺骨を托する地球、我これを研究せずし
てやまんや。」「地理学の本領は、地球表面、今日のあり
さまなり。その過去の歴史と内部の構造とは、吾人、これ
を地質学に学び、その空間における運動、その他天体との
関係は、天文学のつかさどるところなり。地理学もし過去
にさかのぼらざるを得ずば、これ現在を解明せんがためなり。
もし未来を洞察せざるを得ずば、これ現在の真意を知ら
んがためなり。地理学は実に現世的なり。(中略) 現世的
たる、必ずしも寸時の意にあらず。現在とは、過去と未来
をつなぐ永遠の一部分たるにあらずや。」と著述している。

つまり、内村は、地理教育(研究)においては、「塵埃
小の空間の一点(無限大の宇宙空間の中の地球)」という
空間認識や、地質学や天文学といった地学(地球科学)領
域を視野に入れた学習が重要であると説いているのであり、
今日あらためてその重要性が再認識されている「防災教育」
を効果的に展開していくためにも、地学(地球科学)分
野を含めた地理教育の実践が求められている。

(3) 「歴史・政治」を含めた地理教育

米国の地理教科書には、各国(地域)地誌の一環として、
その国(地域)の歴史や政治を学ぶ単元が必ずある。

例えば、アメリカ合衆国の地誌では、建国の歴史(大陸
入植、植民地建設、コロンブス交換、独立戦争、ルイジア
ナ買収、南北戦争、西部開拓、工業化・都市化、公民権運
動、世界の中のアメリカ)と現在の政治(三権分立と連邦
政府・州政府)について詳細な説明がなされており(第6
章1節)、日本の地誌においても、歴史と政治のアウトライ
ン(古代:平安時代までの朝廷政治、将軍時代:鎌倉以
降の武家政権、世界へ:明治以降の近代国家)が紹介され
ている(第28章4節)。これに対し、日本の地理教科書で
は、歴史や政治に関する学習単元が取り上げられることは
ない。わが国では、これらは地理とは別の教科・科目(日
本史、世界史、政治・経済)の守備範囲であり、関連付け
て学ぶ機会は存在しないのである。(表-5 参照)

一方、内村は、歴史に関して、「地理と歴史とは、舞
台と劇曲との関係なり。地は人類ちよう役者が歴史ちよ
う劇曲を演ずる舞台なり。ゆえに地理学なくして歴史を
学ばんとする者は、盤なくして碁を囲まんとするがごと
く、盲人が天文学を攻究せんとするがごとく、全くなし得
べからずにはあらずとも、ほとんどなし得がたき事なり。
(中略) 一国の歴史は、その地とその人との相互作用
(Interaction)の結果なり。博士フリーマン氏曰く「ギ

表-5 日米の高校地理教科書が記述する合衆国と日本の地誌(人と国土)

		米国の教科書が記述する内容	日本の教科書が記述する内容
アメリカ合衆国	自然地理	<ul style="list-style-type: none"> ■多様な地形と豊富な資源 ■多様な気候と植生 ○過酷な天候と災害(地震・津波、竜巻、ハリケーン、洪水など) ■人と環境の関わり ○アメリカ大陸入植と農業による国土整備 ○都市の建設 ○距離の克服(内陸運河、鉄道、高速国道) 	<ul style="list-style-type: none"> ■広大な国土と多様な自然環境 ○ハリケーン(猛吹雪をまじえた寒波)やハリケーンによる被害
	人文地理	<ul style="list-style-type: none"> ■合衆国の歴史と政治 ○建国の歴史(大陸入植、植民地建設、コロンブス交換(Columbian Exchange)、独立戦争、ルイジアナ買収、南北戦争、西部開拓、工業化・都市化、公民権運動、世界の中のアメリカ) ○三権分立と連邦政府・州政府 ■合衆国の経済と文化 ○世界最大の経済力(農業大国、工業大国、サービス業、情報・金融・医療・交通・教育分野へ) ○多様な社会(移民の国⇒人種(民族)、言語、宗教、芸術・大衆文化等の多様性) ■地方別の地誌 	<ul style="list-style-type: none"> ■移民の国(多民族社会) ■経済大国 ○世界の農業のかぎをにぎるアメリカ合衆国 ○進展する科学技術と産業(工業) ○国際社会に影響を与えるアメリカ合衆国(金融、情報技術等と国際問題)
	今日的課題	<ul style="list-style-type: none"> ■9.11テロ対策 ■都市のスプロール問題 ■変化に直面する多様な社会 	<ul style="list-style-type: none"> ○多民族がいかに共生していくか ○国際社会にどのように協調していくか
日本	自然地理	<ul style="list-style-type: none"> ○巨大な経済力を持つ島国「日本」 ○日本の資源(森林、水産資源、銀・石炭等) 	<ul style="list-style-type: none"> ■日本の自然の特徴と人々の生活 ○プレート境界に位置する日本列島 ○構造線が走る日本列島 ○明瞭な季節変化(梅雨、台風、日本海側の積雪) ○日本の災害の特徴と災害対策(地震、津波、火山災害、水不足、豪雨+急勾配河川+低地集落等⇒洪水や土砂災害、高潮) ○開発に伴う災害⇒自然と共生していく知恵
	人文地理	<ul style="list-style-type: none"> ■日本(文化・伝統) ○日本の歴史・政治(古代:平安時代までの朝廷政治、将軍時代:鎌倉以降の武家政権、世界へ:明治以降の近代国家) ○日本の経済(世界第2位の経済力、太平洋ベルト地帯、製造業と貿易、最近の失速) ○日本の文化(伝統的な文化と西欧の影響) ○日本の教育(高度な構造的教育:6+3+3+塾=東大・京大・慶応・早稲田) 	<ul style="list-style-type: none"> ■資源と産業 ○産業の発達と変化 ○農産物の生産と流通 ○資源の生産と消費 ○工業製品の生産と流通 ■生活と文化 ○衣食住 ○消費と余暇活動 ○村落と都市
	今日的課題	<ul style="list-style-type: none"> ■環太平洋造山帯に位置する日本 ○プレート境界に位置する日本列島 ○火山活動、地震(関東大震災・阪神淡路大震災)、津波 ○災害への備え(建築耐震基準や防災教育) ■東アジアの貿易拡大と世界経済への影響 	<ul style="list-style-type: none"> ■少子高齢化 ■人口の集中と都市・住居問題 ■環境・エネルギー問題 ■領土・領海問題、外国人労働者

※アメリカの教科書:『World Geography 2009』(McDougal Littell社)

※日本の教科書:『新詳地理B(初訂版)』(帝国書院)

赤字:日米地理教育の相違点(米国の地理教科書にあって日本の地理教科書に無い項目)

緑字:米国の地理教科書における「日本」の特徴

リシア人によるにあらざれば、ギリシア国は大業を見るあ
たわざりしならん。ギリシア国におけるにあらざれば、ギ
リシア人は大業を遂げ得ざりしならん。されど地と民と相
通合して、兩者より大事業来たれり。」あにこれギリシア
人とギリシア国においてのみしからんや。」と語り、また、
政治に関しても、「地理学を学ばずして政治を談するなか
れ。何となれば、汝は月世界の政治を談する者なればなり。
何となれば、汝は竜宮城の内政を語る者なればなり。すな
わち地理学なしの政治論は有りて無きもの、像（かたち）
なきもの、実なきもの、夢、空想、幻なればなり。政治も
し、懶惰（らんだ） 壮士の寝言ならずば、政治もし不平漢
の空言ならずば、政治にして、もし実物にして神聖なるも
のならば、堅固なる地盤を離れて存すべきにあらず。吉田
松陰がその僕某に告げし言は真理にして事実なり。彼は曰
く、「地を離るれば人なし。人を離るれば事なし。ゆえに
事を成さんと欲する者はまさに地理を究むべし」と。これ、
彼の政治論の、時の空漠たる政治論にまさりて健全にして
深慮なりし理由なり。」と語る。

つまり内村は、「地理と歴史」、「地理と政治」の関連の
深さを説き、地理という基盤が無ければ歴史も政治も存在
し得ないと主張しているのである。また、JICE REPORT
vol.17でも述べたが、歴史とは文明ごと、国家（地域）ご
と、民族ごとに見ようとしなければ、殆ど意味をなさない。

そういう視点からみると、各国（地域）毎の地誌において、
自然地理と関連づけて幅広い人文地理（歴史、政治、経済、
文化等）が学習できる米国の地理教科書は優れていると言
わざるを得ない。「時間」と「空間」はそれぞれ別々に学
ぶのではなく、関連づけて学ぶ必要があるのだ。

(4) 「人と環境との関わり」という学習単元の存在

「国土教育」面から見た米国の高校地理教科書の最大の
特徴は、各国（地域）毎の地誌において、「地形と資源」
「気候と植生」とは別に「人と環境との関わり（Human-
Environment Interaction）」という学習単元が設けられ
ていることである。

これは、「人と国土との間の相互依存関係」という
言葉で置き換えることもできる、このシリーズ（JICE
REPORT vol.16,17,19）で何度も述べてきた「現在、われ
われが享受している豊かで安全な生活は、われわれのご先
祖様が絶え間なく国土に働きかけることによって、国土か
ら恵みを返してもらってきた歴史の賜物である。従って、
現代に生きるわれわれの世代も、国土に対して働きかけを
続け、将来世代に対して、より良い社会基盤を引き継いで
いかなければならない。」という国土学、国土教育の思想
を実践している学習単元である。

表-6は、この学習単元「人と環境との関わり（Human-
Environment Interaction）」が取り扱っている具体的テー

表-6 「人と環境の関わり」(Human-Environment Interaction) の学習テーマ¹³⁾

	テーマ1	テーマ2	テーマ3
(Unit2) 合衆国とカナダ	■アメリカ大陸への先住民の入植と農業による国土の 改変(農作物の主要輸出国へ)【米国、カナダ】	■都市の建設(地下空間利用が進む寒冷地・モント リオール、スプロール化が進むロサンゼルス)【米 国、カナダ】	■内陸運河、大陸横断鉄道、国道ネットワークの 整備による「距離の克服」【米国、カナダ】
(Unit3) ラテン・アメリカ	■農業が環境を変える(焼き畑農業が熱帯雨林に 及ぼす影響など)【ブラジル】	■都市化(地方から都市への人の移動)に伴う問 題(スラム化や失業、環境悪化とインフラ未整備) 【アルゼンチン、チリ、ウルグアイ】	■観光産業のプラス効果(収益・雇用等)とマイ ナス効果(混雑・公害等)【メキシコ、カリブ諸国】
(Unit4) ヨーロッパ	■ポルダー(堤防や水路を用いて開拓した埋 立地)整備による国土創造の歴史【オランダ】	■運河建設によるヴェネツィア(ベニス)の商業 的發展と今日的課題(水害や水質汚濁など)【イタ リア】	■数百年にわたる森林伐採と酸性雨の被害に よって木々が枯死している「黒い森(シュヴァルツ ヴァルト)」【ドイツ】
(Unit5) ロシアと 周辺共和国	■大規模な農業政策によるアラル海の水量減少 (約80%)と化学肥料等流入の影響(周辺住民の 疾病)【中央アジア】	■シベリアの厳しい気候条件とナポレオンの侵略 をも阻んだロシアの「冬将軍」【ロシア】	■シベリア横断鉄道の建設と政治的・経済的発 展【ロシアと周辺共和国】
(Unit6) アフリカ	■サヘル(サハラ砂漠の南縁部)の砂漠化進行と その原因(耕作や放牧などの人間活動にも原因 がある)【サハラ関係諸国】	■石油採掘が引き起こした国土・国民への壊滅 的な打撃(原油流出、燃え上がる天然ガス、健康 被害など)【ナイジェリア】	■ナイル川の洪水制御・農業利水に資するア スワンハイダム建設とそれに伴う問題(遺跡等の 移転、農地の残留塩分除去、マラリア等疾病の 増加)【エジプト】
(Unit7) 西南アジア	■貴重な水を供給するための努力(古代の技術、 ダムや灌漑施設)と現代の水技術(海水の真水化 など)【南西アジア諸国】	■化石燃料の発掘からパイプラインによる原油 の輸送、石油精製に至るプロセスと輸送中の原 油流出リスク【南西アジア諸国】	—
(Unit8) 南アジア	■ヒンズー教の聖地「母なるガンジス川」が果 たす偉大な役割と深刻な水質汚濁問題【インド】	■フェニ川の洪水制御を実現するための発展途 上国としての努力と完成したダムの効果(価値) 【バングラデシュ】	—
(Unit9) 東アジア	■長江に建設された三峽ダムのプラス効果(洪水 制御、農業用水開発、電力開発、内陸航路整備) とマイナス効果(大規模な移転、遺跡の喪失、膨 大な建設コスト、生態系への影響)【中国】	■山地の島国に1億2700万人が暮らす(国土の 約3%しかない狭い沿岸平野に60%以上の国民 が暮らす)日本の都市生活(公害、狭い住居、長 距離通勤、埋立)【日本】	—
(Unit10) 東南アジア・オセ アニア・オースト ラリア	■太平洋を渡るための航海図の作成と特別なカ ヌーの開発【太平洋の島々】	■オーストラリア大陸へのウサギの移入に伴う深 刻な土壌腐食/生態系への影響【オーストラ リア】	■ビキニ環礁における水爆実験の実施と長期間 にわたる周辺環境への影響【マーシャル諸島】

マを各地域毎に整理したものである。

合衆国とカナダ (Unit2) では、①アメリカ大陸への先住民の入植と農業による国土の改変、②都市の建設 (地下空間利用が進む寒冷地・モントリオール、スプロール化が進むロサンゼルス)、③内陸運河 (図-5 参照)、大陸横断鉄道、国道ネットワークの整備による「距離の克服」の3事例が取り上げられている (第5章3節)。

また、ヨーロッパ (Unit4) では、①ポルダール (図-6 参照) 整備による国土創造の歴史【オランダ】、②運河建設によるヴェネツィアの商業的發展と今日的課題【イタリア】、③数百年にわたる森林伐採と酸性雨の被害によって木々が枯死している「黒い森 (シュヴァルツヴァルト)」【ドイツ】の3事例が取り上げられている (第12章3節)。

そして、日本を含む東アジア (Unit9) では、①長江に建設された三峽ダムのプラス効果とマイナス効果【中国】、②山地の島国に1億2700万人が暮らす日本の都市生活【日本】の2事例が取り上げられている (第27章3節)。

以下では、自らの国 (地域) について語った「米国とカナダ (Unit2) の3事例」についてのみ、それらの要約を紹介するが、いずれも、「人による国土への働きかけと、国土から人への恵み」に関する学習内容であることは疑いようがない。

【テーマ1】アメリカ大陸への入植と農業による国土の改変

・人間が登場するまで、北アメリカ大陸の地形は風化作用や浸食作用といった自然の力によってしか改変されることはなかったが、数千年前にアメリカ先住民の祖先たちが入植して以降、国土の改変が始まった。

■入植

・北アメリカ大陸の最初の住人は、当時陸続きであったベーリング地峡をわたってシベリアからアラスカに渡ってきた遊牧民であったと言われている。彼らは国土をあちこち移動しながら、狩猟・漁撈・採取生活を行っていた。

・その後は、生存していくための水の確保が容易な沿岸地域や川辺に住み始め、地域毎の自然条件 (気温や気候、山地や森や平原や砂漠といった自然環境) に適応しながら暮らしてきた。

■農業

・約3,000年前に農業が狩猟・採取生活に取って代わってから、先住民の本格的な定住化が進むとともに、穀物の栽培によって彼らは自分の思う通りに国土を造り替えることができるようになった。

- ・森林地域では、建築用や燃料用の木材を切り出し始め、川沿いの肥沃な低地や氾濫源では土地を耕し、灌漑施設を整備して、穀物栽培を始めた。
- ・彼らが最初に栽培した植物 (トウモロコシ、大豆、スカッシュ) は、今では世界の主要作物となっている。
- ・農業は今日でも米国とカナダの重要な産業であり、実際、両国は農作物の主要輸出国である。

【テーマ2】都市の建設

・都市がどこに形成されて、どのように成長していくかは、場所 (physical setting) に大きく依存している。初期の開拓者たちにとって、水辺近くに住むことは極めて重要なことであったが、それだけではなく、地形、気候、天候、天然資源といった要素も都市形成に大きな影響を与えてきた。

■モントリオール=環境への適応

- ・ケベック州のモントリオールは、セント・ローレンス川とオタワ川の合流点にある川中島に位置し、1642年にフランス人植民地として建設、モン・ロワイヤル山を中心として発展してきた。
- ・モントリオールは、現在、大規模な港湾を持つカナダ第2の都市であるが、年間の100日以上が氷点下という厳しい気象条件下にある。このため、冬期の厳しい環境に耐えられるよう、人々は室内か地下で生活を展開するようになっていった。実際、モントリオールの街には巨大な地下街が存在する。

■ロサンゼルス=都市のスプロール化

- ・モントリオールと異なり、カリフォルニア州のロサンゼルスは、年間を通して温暖な気候下にあるとともに、太平洋沿岸の良好な場所に位置している。
- ・1900年代の初頭まで、小さなスペイン人植民地でしかなかったロサンゼルスは、時代とともに渓谷や荒れた丘陵地帯にまで拡大し、1980年代にはアメリカ合衆国第2の都市にまで成長した。
- ・しかし、急激な都市の拡大は、大気汚染や水質汚濁、地震地盤上の都市建設といった問題を顕在化させた。しかしそのような問題ですら、ロサンゼルスという都市の成長を止めることはなかった。ロサンゼルスは今、469平方マイルという面積を有しており、都市圏エリアで見れば、4,060平方マイルにまでその面積は拡大している。

【テーマ3】距離の克服

- ・アメリカ先住民やヨーロッパから入植した移民たちは、国土を移動していくとき、多くの障害 (膨大な距離、困難な

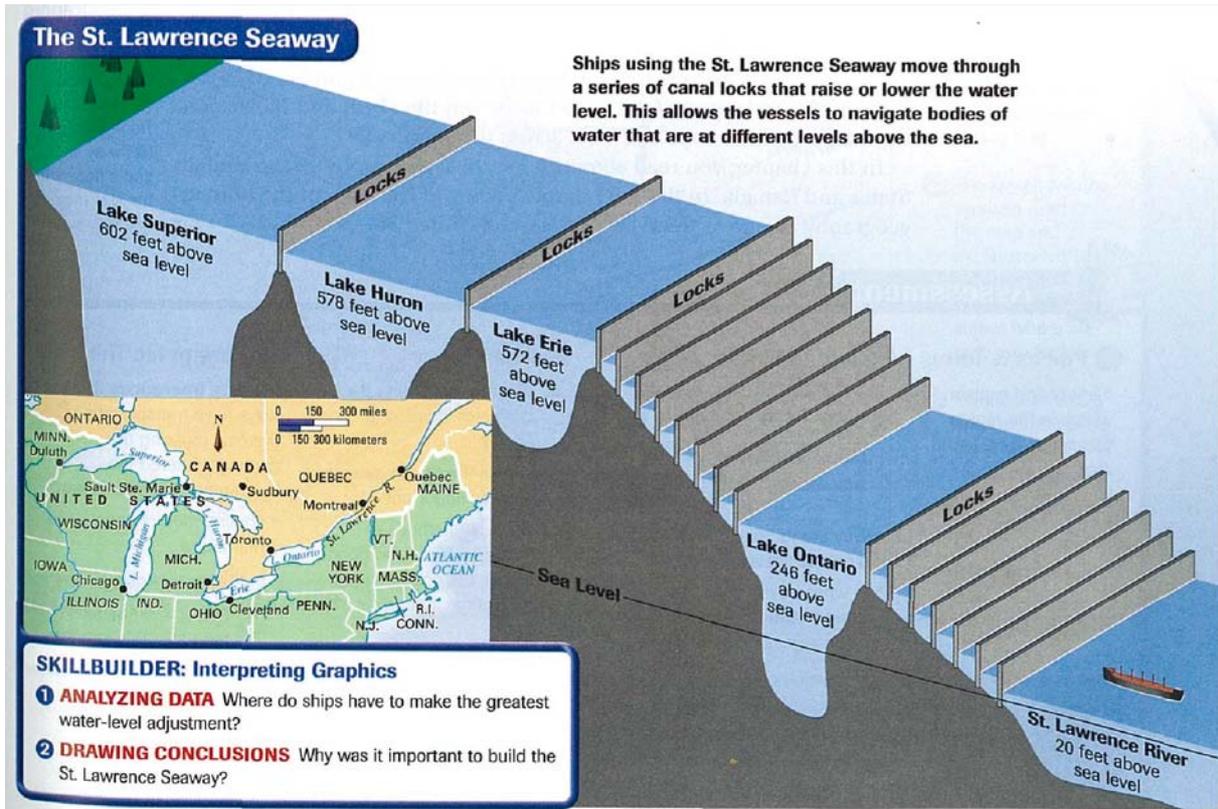


図-5 セントローレンス海路 (McDougal Littell 社の高校地理教科書より) ¹³⁾



図-6 ポルダーの建設 (McDougal Littell 社の高校地理教科書より) ¹³⁾

地形、厳しい気候などに直面した。しかし、彼らは大陸を駆け抜け、自然環境を克服していった。

■街道と内陸水路 (TRAILS AND INLAND WATERWAYS)

- ・ヨーロッパから入植した移民たちは大西洋沿岸部にコロニー(植民地)を建設し、そこを起点として、ナショナル・ロード (National Road)、ウイリダネス・ロード (Wilderness Road) オレゴン街道 (Oregon Trail) やサンタフェ街道 (Santa Fe Trail) 等の街道や、ミシシッピ川やオハイオ川等の内陸水路を使って内陸部(西部)に移動していった。
- ・また、彼らは水路を水路を接続するために、運河のネットワークを構築していった。1825年に開通したエリー運河 (Erie Canal) は、五大湖と大西洋の間の舟運を可能にした最初の運河である。
- ・北アメリカにおける最も重要な深水舟運ルート「セントローレンス海路 (Saint Lawrence Seaway)」は、大西洋から五大湖のスペリオール湖まで船が航行できる海路で、米国とカナダの合同プロジェクトとして1950年代に完成した。当該海路は、多くの閘門の水位調整(約600フィートの上下移動)を行うことにより、巨大な外洋航海船を北アメリカの工業・農業中心地まで航行させることに可能にした。

■大陸横断鉄道 (TRANSCONTINENTAL RAILROADS)

- ・蒸気機関車と鉄道の整備により、大西洋岸から太平洋岸までの大陸横断が迅速かつ容易になった。
- ・鉄道建設は北部アメリカにおいて19世紀初頭から始められたが、大陸を横断する鉄道を建設するためには、国土の厳しい自然条件(ロッキー山脈など)を克服する、具体的には、森林を切り開き、渓谷に橋を架け、山脈にトンネルをくり貫いていく必要があった。
- ・最初の米国大陸横断鉄道は1869年に完成し、モンリオールからブリティッシュ・コロンビアに至るトランス・カナダ・レイルロード (Trans-Canada railroad) は1885年に完成した。
- ・これらの幹線鉄道ネットワークは、大量の物資や旅客を運ぶことにより、経済発展や国家統一に寄与してきた。
- ・今日では、米国の鉄道ネットワークは世界第一位であり、カナダのそれは世界第三位である。

■国道ネットワーク (NATIONAL HIGHWAY SYSTEMS)

- ・20世紀初頭からの自動車社会の到来によって道路建設に拍車がかかり、今日では、米国国内に約400万マイル、カナダ国内に約56万マイルの道路ネットワークが構築されている。
- ・南部地域に人口が集中しているカナダでは、国土の南部に位置する各都市を東西に結ぶ高速道路ネットワークが整備された。カナダの主要幹線道路であるトランス・カナダ・ハイウェイ (Trans-Canada Highway) は、大西洋岸のセント・ジョンズ(ニュー・ファンドランド州)から太平洋岸のビクトリア(ブリティッシュ・コロン

ビア州)に至る約4,860マイルの延長を有している。

- ・一方、米国では、46,000マイル以上の州間高速道路(インターステート・ハイウェイ、Interstate Highway) ネットワークが国土を縦横無尽に走っており、1950年代以降は、カナダやメキシコとのネットワーク接続も進められている。

一方、内村は、「地の目的はいかん。人類を発達せしむるにあり。」地理の目的は歴史の目的なり。(中略)人類は地球廻転の度数と共に完全に向かい進みつつあることは、極端厭世論者にあらざるほかは、ことごとく識者の承認するところなり。しかして人類の棲息所たる地は、この進歩、啓発を助け、促すものならざるべからず。人類の進歩、啓発を促すために、地はいかなる特質を有せざるべからずか。(一)進歩を助けんがために、地は開拓、耕耘、運輸、交際の便利を人類に供せざるべからず。(二)啓発を助けんがためには、地は多少の障害を人類に供せざるべからず。地の配列、構造にして全く人類進歩を奨励せざらんか、人類は失望に沈んで、進まざるべし。一の障害物をも供せざらんか、進歩、簡易に過ぎて心霊の怠惰と傲倨(きょうごう)とを招き、知と霊とは啓発せざるべし。適宜なる奨励と適宜なる障害とは教育上の必要にして、天が人に与うるに地をもってせしや、この特質を有する地球をもってせられたり。われらの棲息する地球は教育上絶大の価値を有するものなれば、はなはだ完全にして、全く完全ならず。すなわち、この地球は人の労力をもって初めて完全たるを得るものなり。」と述べている。

米国の地理教科書において実践されている「人と環境との関わり」に関する教育、『地人論』において内村鑑三が説いている「この地球は人の労力をもって初めて完全たるを得るものなり」とする教育を、わが国の地理教育(地理教科書)において導入・実践していくことが求められる。

(5) その他(日本をどのように見ているか)

米国の地理教科書では、自国の自然環境の多様性や自然災害の危険性を説明するだけでなく(図-7参照)、日本が大地震や津波のリスクを抱えた国家であることを繰り返し指摘している。具体的には、地理の基礎(Unit1)において、阪神淡路大震災の状況が写真入りで解説されているとともに(第2章3節)、東アジア(Unit9)の今日的問題の第1テーマとして「環太平洋造山帯に位置する日本」が取り上げられ(図-8参照)、日本列島がプレート境界に位置すること、

そのため火山活動や地震（関東大震災・阪神淡路大震災）・津波発生の可能性が高いということ、そしてこれら災害への備え（建築の耐震基準化や防災教育）が行われていることが説明されている（第29章1節）。

また、日本の人文地理の単元（第28章4節）において、「日本の教育」を取り上げ、小学校（6年）、中学校（3年）、

高校（3年）、塾（juku）を経て、東大・京大・慶応・早稲田といった大学トップ校に進学することが日本の高度な構造の教育システムであると紹介している部分が興味深い。

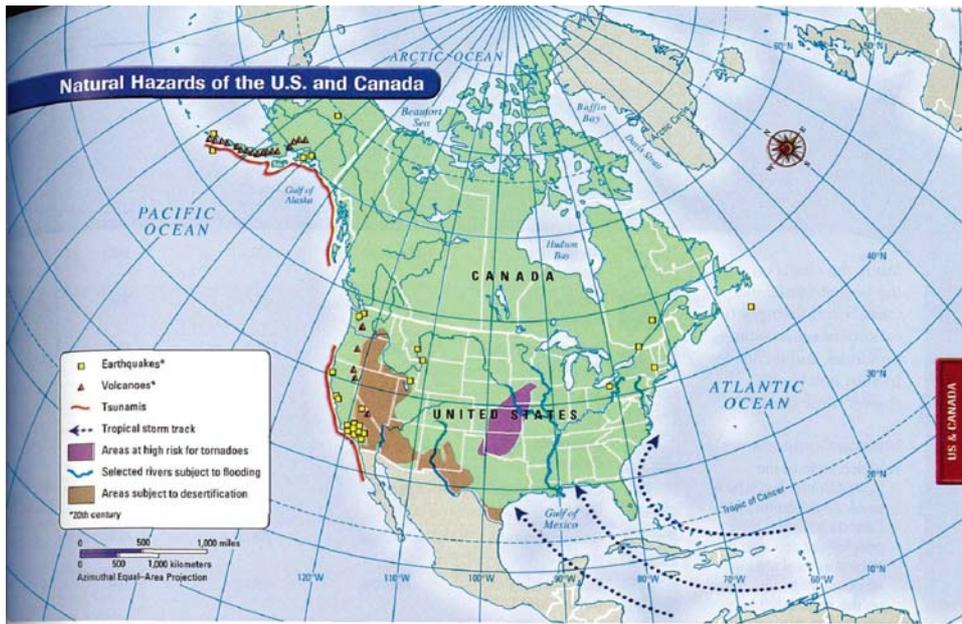


図-7 合衆国・カナダの自然災害（McDougal Littel 社の高校地理教科書より）¹³⁾

Chapter 29
TODAY'S ISSUES
East Asia

SECTION 1
The Ring of Fire

SECTION 2
Trade and Prosperity

Case Study
POPULATION AND THE QUALITY OF LIFE

GeoFocus
How do people in East Asia deal with issues of a rapidly changing society?

	Causes	Effects
Issue 1 Ring of Fire		
Issue 2 Trade		
Case Study Population		

The Ring of Fire
How might people in East Asia prepare for earthquakes and volcanoes?

Physical Forces in the Ring of Fire
Like Kobe, many Japanese cities are threatened by earthquakes. This is because Japan is part of the **Ring of Fire**—a chain of volcanoes that line the Pacific Rim. (See the map on the next page.)

SHIFTING PLATES As you learned in Unit 1, the outer crust of the earth is made up of a number of shifting tectonic plates that continually bump and slide into each other. When a dense oceanic plate meets a less dense continental plate, the oceanic plate slides under the continental plate in a process called subduction. The area where the oceanic crust is subducted is called a trench.

In East Asia, the Pacific oceanic plate encounters the Eurasian continental plate. When the oceanic plate moves under the continental plate, it crumples the continental crust, building mountains and volcanoes such as those that form the Ring of Fire.

At the same time, tremendous stress builds up along the edges of the plates. The stress keeps building until eventually the plates move suddenly and violently. The result is an earthquake.

Main Ideas

- The islands of Japan form part of a geologically active area called the Ring of Fire.
- Because of its location, Japan has faced disastrous earthquakes, volcanic eruptions, and tsunamis.

Places & Terms
Ring of Fire
Great Kanto earthquake
tsunami

HUMAN-ENVIRONMENT INTERACTION An elderly woman is carried from a collapsing building during the earthquake in Kobe, Japan, in 1995. What damage is apparent in the photograph?

The Ring of Fire 661

図-8 環太平洋造山帯に位置する日本（McDougal Littel 社の高校地理教科書より）¹³⁾

3.3 米国の地理教育の特徴（まとめ）

以上、日米の中学校及び高校の地理教科書を比較することにより、米国における地理教育の内容を検証してきたが、前章の「米国における教育改革と地理教育」とあわせて再整理すると、米国の地理教育の特徴は概ね次のようにまとめることができる。（図-9、10 参照）

(1) 「地理学の5大テーマ」という明瞭な哲学の存在

地理学という複雑で（扱う分野が広く）興味を持ちにくい学問領域を、5大テーマ（①位置、②場所、③人と環境との関わり、④移動、⑤地域）という、非常に単純化され、分かりやすく、多くの人々に受け入れやすいような学習体系に再構成している。また、「地理学の5大テーマ」は、現在では地理教科書の冒頭において必ず位置づけられ、繰り返し教えられるべき学習項目として、不動の地位を築いている。

(2) 「地学」を含めた地理教育

米国の地理教科書では、太陽系（天体）や地球の構造（大気圏や地球の内部構造）、地球の内作用（プレートテクニ

クス、地震、火山）という「地学（地球科学）」に分類される内容が、十分なページを割いて解説されている。このため、「無限大の宇宙空間の中の地球」という空間認識の構築や、今日あらためてその重要性が再認識されている「防災教育」の効果的展開が可能となっている。

(3) 「歴史・政治」を含めた地理教育

米国の地理教科書には、各国（地域）毎の地誌において、その国の歴史や政治を学ぶ単元が必ずある。このため、各国毎に、自然地理と関連づけて幅広い人文地理（歴史、政治、経済、文化等）を学習することができる、言い換えれば「時間」と「空間」を関連づけて学ぶことができる。

(4) 「人と環境との関わり」という学習単元の存在

各国（地域）毎の地誌において、「人と環境との関わり（Human-Environment Interaction）」という学習単元が設けられている。これは、「国土への人の働きかけと、国土からの恵み」という国土学、国土教育の思想を実践している学習単元に他ならない。

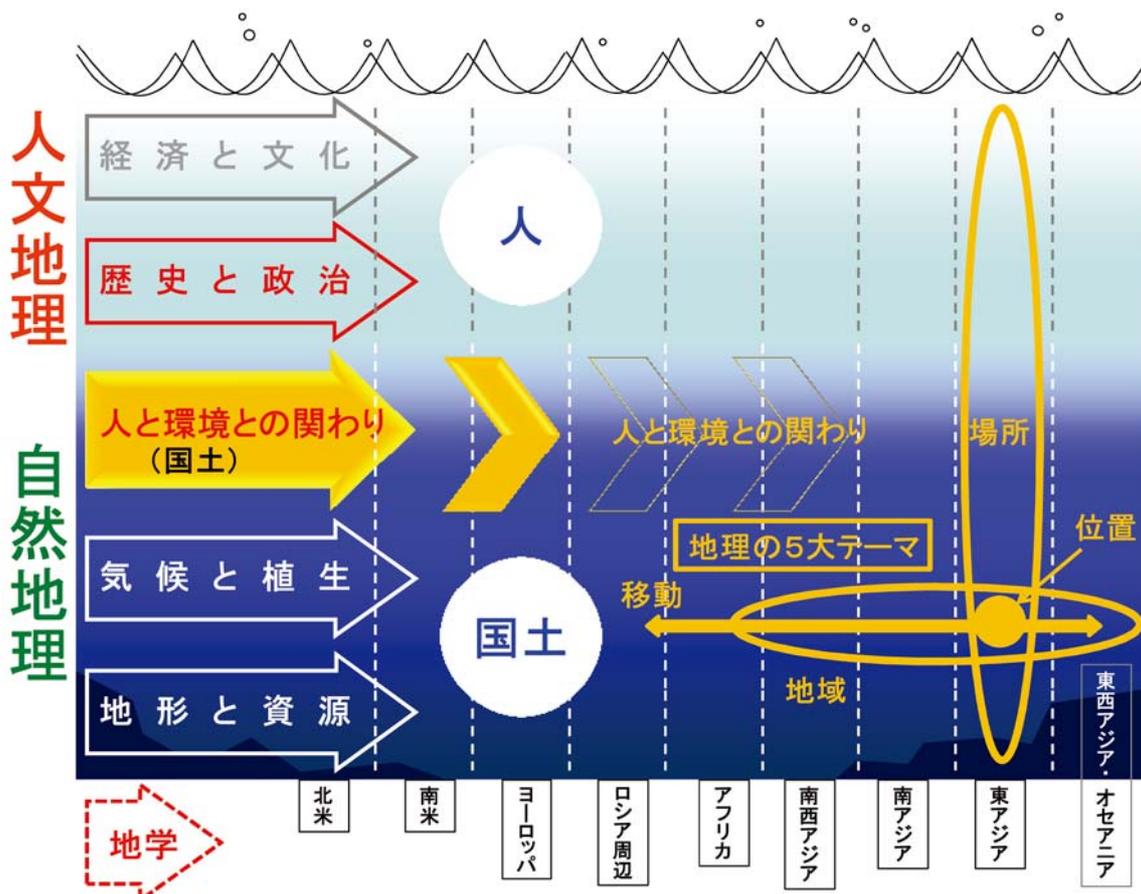


図-9 アメリカ人の学ぶ「世界地理」の構造（高校地理教科書）¹³⁾

歴史の深層としての「国土」

= Fernand Braudelの『地中海』に学ぶ

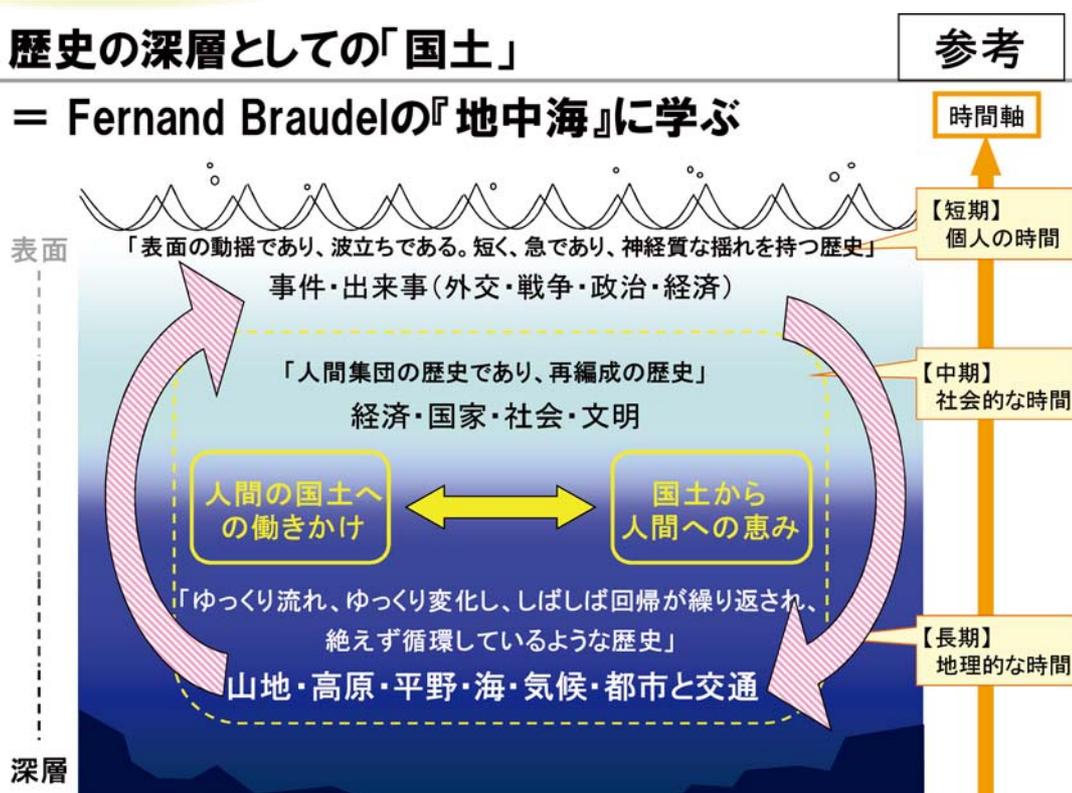


図-10 歴史の深層としての「国土」(Fernand Braudelの『地中海』に学ぶ)⁹⁾

4. おわりに

内村鑑三は『地人論』後半において、ヒマラヤ山脈の西北隅に人類が初めて出現して以降の世界文明の発展を説く。そして、日本国は西漸する西洋文明と東漸する東洋文明とを総合止揚すべき世界的立場にあるとの確信を、世界地理と世界歴史とにより証明しようとするのである。

例えば、ローマ帝国(イタリア)については、「見よ、イタリア半島の、東南、ギリシアに向かって伸びるを。その長靴形は南北に直立せずして、踵をもってギリシアを受くるの状をなせり。(イタリアは無礼なり。)すなわち、その靴底に当たるの辺なるタラント湾の沿岸、ならびにシチリア島の東部は、はじめてギリシア人の植民を受けし所にして、ギリシア文明の侵入はこの辺よりせり。イタリアはギリシアと欧大陸の中真との間に横たわる掛橋の地位にあり。歴史世界が拡張して地中海大となりしや、イタリア半島は世界の指導者ならびに保護者たるの自然の地位をしめたり。(中略)紀元四百年に至りて、時の文明世界は全くローマ化せられたり。(中略)ローマは共和国として起こり、共和国のごとく世界を支配せり。各国民の特性はローマによりて湮滅(いんめつ)せられざりし。否、かえってしからずして、ますます伸張するを得たり。ローマはギリ

シアをして世界を知化せしめ、ユダヤにこれを靈化するの便益を供せり。ローマの天職は実に旧世界を総合して新世界の発端を開くにありし。ギリシア人の文明とユダヤ人の宗教を欧大陸に紹介伝染するにありき。見よ、イタリア国は南端に西亜とギリシアとを受けて、北境は仏、独、墺の三国をもって包まるるを。伊国はよくその天職を尽くせり。文明は彼女によりてライン河辺に橋渡りせり。」と著述し、イタリアという国土とローマ人(国民)が世界文明発展の橋渡しの役割を担ったとするのである。(「地人相関論」の展開)

また、環境考古学者の安田喜憲氏は『敵を作る文明 和をなす文明』(共著)の中で、「戦前の地理学は「地人相関論」と呼ばれ、大地と人間の関係を盛んに研究していた。そこでは、環境が人間の歴史を決定する可能性があることが十分に認められていた。人間はもちろん環境を改変するものの、あくまでも人間は自然の子供である、という考え方が根強く残っていたのである。私はその考えに深く共鳴し、大学で地理学を専攻した。ところが私が大学に入った頃は、高度経済成長期のまっただなかで、人間の歴史は人間の社会や経済活動によって決定されるのであり、気候や環境の変動で変わるものではないという歴史観が横行していたのである。その当時学会の主流を占めていたマルクス

史観は、社会構成史観、ある意味で政治・経済主導型の歴史観だった。そのため、環境の変化が歴史を変えろというような学説は、当時は「環境決定論」という烙印を押されていた。」と述べ、こうした「地人相関論」を「環境決定論」として軽視した日本の戦後地理学を否定的に捉えている。そして「これは私にとってもきわめて悲しむべきことであるが、いま多くの大学で「文理融合」の御旗のもとに、地理学の講座がどんどん潰されている。考えてみれば、その文理融合こそ、本来地理学が究めてきたものであった。地理学教室は、京大では文学部にあるが、東大や東北大では理学部にある。文学部と理学部両方にあるような学科は地理学しかない。そうした文理融合を目指した地理学が戦後五十数年を経て、ことごとく捨て去られようとしているのである。」と地理学の将来を憂いている。

確かに、現在の高校地理教科書と比較した場合、昭和31年の検定済教科書の方が、「国土への働き掛けと、それに対する国土からの恵み」に関連する記述を数多く取り上げていた（JICE REPORT vol.17）。そして、今日、米国の高校地理教科書では、「人と環境との関わり（Human-Environment Interaction）」という学習単元がしっかりと位置づけられている。「地人相関論」や「人と国土」に関する教育、こうした地理教育・国土教育の復活を望んで止まない。

謝辞

本研究報告をまとめるにあたり、問題の提起から、向き合うべき素材への気付き、人と国土との相互関係を時間軸と空間軸から見る「国土学」の視点など、俯瞰的で示唆に富んだご指導と格別のご鞭撻を賜った大石久和先生（（財）国土技術研究センター理事長）に、深甚なる感謝を捧げます。また、同センター情報・企画部の生内明子さんには、本稿の作成・編集に当たり、ひとかたならぬご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 森田康夫、『アメリカの地理・歴史教科書の検証と国土教育（前編）－オバマ大統領演説と「合衆国史」教育－』、JICE REPORT vol.19、（財）国土技術研究センター、平成23年7月
- 2) 田部俊充、『アメリカ合衆国の地理教育』、地理教育講座第1巻「地理教育の目的と役割」（中村和郎・高橋伸夫・谷内達、犬井正）、古今書院、2009年1月
- 3) 中山修一、『地理にめざめたアメリカー全米地理教育復興運動』、

- 古今書院、1991年5月
- 4) 小池治、『アメリカの教育改革とガバナンス』、横浜国際社会科学研究所・第16巻第1号、2011年7月
- 5) 佐藤三郎、『アメリカ教育改革の動向－1983年『危機に立つ国家』から21世紀へ－』、教育開発研究所、1997年
- 6) 大石久和、『国土学事始め』、毎日新聞社、平成18年3月
- 7) 大石久和、『国土学再考「公」と新・日本人論』、毎日新聞社、平成21年2月
- 8) 森田康夫、『「国土教育」の視点から見た社会科教科書の検証と次世代教育論』、JICE REPORT vol.16、（財）国土技術研究センター、平成21年12月
- 9) 森田康夫、『「国土教育」（その2）高等学校地理歴史科教育を考える』、JICE REPORT vol.17、（財）国土技術研究センター、平成22年7月
- 10) 田部俊充・山縣耕太郎・小口久智・多胡清一、『アメリカ合衆国における「地理ナショナルスタンダード（1994年版）」の全訳』、新地理、vol. 45-3, p28-42, vol. 45-4, p54-66, vol. 46-1, 56-68、1997年～1998年
- 11) 山縣耕太郎 (National Geography Standard) ホームページ <http://www.juen.ac.jp/shakai/kotaro/NGS/index.html>
- 12) McDougal Littell, a division of Houghton Mifflin Harcourt、『World Cultures and Geography 2008』（2008年版）
- 13) McDougal Littell, a division of Houghton Mifflin Harcourt、『World Geography 2009』（2009年版）
- 14) 五味文彦・斎藤功・高橋進ほか45名、平成17年検定済『新編 新しい社会 地理』、東京書籍
- 15) 高橋彰・平戸幹夫・片平博文・矢ヶ崎典隆・内藤正典・杉谷隆・松本淳・戸井田克己・友澤和夫、平成18年検定済『新詳地理B 初訂版』、帝国書院
- 16) 内村鑑三、『地人論』、日本の名著38（内村鑑三）、中央公論社、昭和46年5月
- 17) 川勝平太／安田喜憲、『敵を作る文明 和をなす文明』、PHP研究所、2003年5月
- 18) 岩田孝三、昭和31年検定済『人文地理』、帝国書院

森田康夫

現職：国土交通省 国土技術政策総合政策研究所 総合技術政策研究センター
建設マネジメント技術研究室 室長